

シリーズ後藤新平人脈考⑩

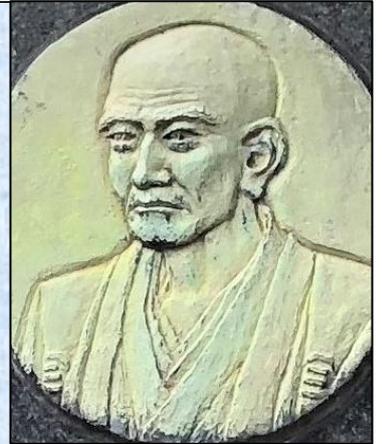
高野 長英

岩手県水沢出身。幕末の蘭学者。後藤新平の本家の出で、母方の高野家の養子となる。新平は長英の再従弟の孫にあたる。長英と同世代の新平の祖父實仁は、留守家に仕えて目付役であったが、長英の事件に座して退役した。

1820(文政三)年、16歳の長英は実兄・後藤湛斎と共に江戸に出る。祖父から習った「もみ治療(按摩)」で食いつなぎ、医者・杉田伯元(杉田玄白の養子)に師事、次いで漢方と蘭学に通じた医者・吉田長叔に師事。18歳の時、師の「長」の一字を取って「長英」と改名。21歳で長崎に遊学、シーボルトに学び、後に幕政を批判し入牢、脱獄後、身をやつして医業に従事したが、捕吏に襲われ自殺した。新平の誕生に先立つことわずか7年であった。

歩兵・騎兵・砲兵の三兵の訓練と実戦技術を説く兵書の翻訳や生理学の翻訳等、多方面の訳書を残した。モリソン号再来で、打払いの政策をまた取るべきではないことを訴えた匿名の「夢物語」と渡辺崋山の「慎機論」とは幕府ににらまれ、崋山が逮捕された後、長英は自首し、過酷な運命を辿ることになった。

<『近代日本と「後藤新平山脈」100人』(後藤新平研究会):藤原書店>



(1804年~1850年)

【高野長英著『二物考』:天保7年新鐫】

天保の飢饉に際して、庶民の窮乏を救うため、「早ソバ」と「馬鈴薯(じゃがいも)」の栽培を勧めた。本書は、天保7(1836)年大観堂蔵版の初版本である。



【『実業の世界』第6巻第4 原稿】

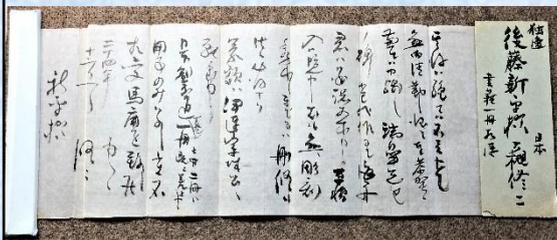
逋信大臣(新平)時代、「初対面に於て余が勝海舟伯より受けたる印象」として、「横を向いたまま話をするのを奇妙に感じたこと、頸の筋肉の話をして、状況予見の秘訣を学んだこと」などを記している。(明治42年4月1日原稿)



【高野長英顕彰碑(東京北青山善光寺)】1964年(昭和39年10月)再建  
長英の名誉が回復されたのは明治31年で、正四位が授与された。北青山の善光寺には、後藤新平・大槻修二らの働きかけにより勝海舟の撰文、伊達宗城公篆額の顕彰碑が建立された。第二次世界大戦で破損したため、現在の碑は、昭和39年10月、一部を活用し新たに造られたものである。(英語と日本語で併記)

【大槻修二から後藤新平への手紙】

高野長英の碑については、小生の代作にて勝海舟は承諾したので原稿をご覧に入れる。もっとも、彫刻となるまでには刪修もする必要がある。篆額は伊達宗城公へ願っていることなど。(修二父:磐溪、弟:文彦)



創建時碑文原稿

高野長英先生碑  
庚戌之冬横谷宗也  
額有火藏宗也曰  
々額有火藏宗也曰  
一夜東火災脱走海  
頼君力以寄一身可  
方家人而庇公方罪  
去間一月道路喧傳  
街為警迹所知直入  
絶喉而死余聞言泣  
平未曰長英実為吾  
見叙叙之曰先生謹  
後藤新平



【高野長英先生頌徳碑】(水沢公園高野記念館敷地)1901年(明治34年)建立

碑文は、広瀬淡窓の門人である谷口中秋(佐賀県)の撰による。その結びに「先師淡窓先生又言吾が門下の士数千人一飯ノ間モ国ヲ憂フルヲ忘レサル者ハ、其レ唯長英ノミカト、亦以テ其ノ人ト為リヲ知ルベキナリ」と漢文で刻まれている。(広瀬淡窓:江戸時代の儒学者、教育者、漢詩人。豊後国日田の人。淡窓は号で、通称は寅之助。)

【建碑賛助芳名録】

水沢公園内に長英顕彰碑を建立するための賛同者名簿。(ビッグネームあり!)

